

国 語 科

I 国語教材の検討と指導

——現代国語教材の検討と古典乙Ⅱの文学史指導——

鈴 木 洋 一 郎

まえがき —— 今までの研究経過 ——

国語教材の検討と指導は国語科数年来の研究テーマであり、新教材発掘ををめぐりつつ、国語教材（漢詩と古典入門教材）について本校紀要17集と18集に発表した。このレポートもそのシリーズとして、「現代国語」教材を検討し、また別に古典乙Ⅱにおける文学史指導の一つの試みをまとめた。

教える教材より生徒が自主的に学ぶようになっていく国語教材の中で「現代国語」ほど、多様な性格をもち、学年配列の基準が明確になっていないものがあるまい。改訂学習指導要領にもとづいた新「現代国語」の教材が以前のもものと比較してどのような変わり改められたか、その特色を考究することによって指導法を考える一つの「目やす」としようとするのである。

また、古典学習での文学史指導には、別冊として文学史のテキストを使用したり、教科書中の解説文を中心に進めたり、原文の学習をしながら文学史的解説を加えるという三つの取扱い方がある。この報告では、教材が文学史的に配列されている古典乙Ⅱ学習でどんな指導をしたかということをもとめた。上古文学という文学史の一部分であるが、次に中古文学、中世文学の指導の試案として発表したいと思う。

本 論

1. 「現代国語」教材の特徴とその検討
2. 古典乙Ⅱでの文学史指導と教材の発掘

1. 現代国語教材の特徴とその検討

一 教材調査

「現代国語」教科書を10社(別注)について調査し作者別、作品別にその採用数の多いものを挙げる

(-) 作者別頻度数

回数	作 者 (歌人, 俳人は除く)
9	志賀直哉 芥川龍之介
8	夏目漱石

7	梅棹忠夫
6	太宰 治 村野四郎 井伏鱒二 川端康成
5	唐木順三 河盛好蔵 井上 靖 中島 敦
	安部公房 小林秀雄 三好達治
4	森鷗外 亀井勝一郎 三木清 高村光太郎
	谷川俊太郎 朝永振一郎 高橋和己
	山崎正和 加藤秀俊 宮沢賢治 中原中也
	金田一春彦 萩原朔太郎
3	丸山薫 室生犀星 田中美知太郎 堀辰雄
	矢内原忠雄 安岡章太郎 西田幾多郎

(-) 作品別頻度数

回数	作 品 (作者名)
4	伊豆の踊り子 ころも 羅生門 舞姫
	山月記
3	黒い雨 幸福について 読書の技術
2	私の個人主義(漱石) 幸福(安岡) 舞踊会
	(芥川) 浄瑠璃寺の春 私の文章修業 手紙
	の文体・青春について(河盛) 滞独日記(朝永) 隔絶の時代(和己) 濠端の住まい
	足摺岬 投網

二 教材の特徴

調査した教材の作者、作品は現在、研究室所蔵の教科書のもので、未調査の出版社、また学年のものもあって、その点、十分とは言いがたいが、改訂現代国語の傾向が理解できたと思う。この教材の特徴は、従来使用されていた教材との比較において確かめて見ると、重要であるが、とりあえず1年、2年のものを中心にまとめてみると、

(-) 従来と変わりなく人気のある作家

「ころも」「それから」の漱石、「舞姫」の鷗外

「伊豆の踊り子」の康成、「羅生門」の芥川などを始め、藤村、直哉、太宰治、木下順二、中野重治、井上靖、井伏鱒二などが挙げられる。また評論家としては、小林、唐木、河盛、亀井、福沢、湯川、中村（光）、柳田、三木、朝永、丸山（真）田中（美）。詩人では中也、朔太郎、達治、順三郎。

(二) 人気のでている作家

中島敦、安部公房、谷川俊太郎、遠藤周作（ヴェロニカ、沈黙）また新たな詩人としては寺山修司、鮎川信夫、塚本邦雄などがあげられるが、またこれに反して人気のおちた作家には、三島由紀夫、菊池寛、永井荷風が目立っている。

(三) 初登場と見られる作家

大岡信、「わが青年論」「自立と挫折の青年像」の高橋和己、「鳥」「ヒロシマノート」の大江健三郎、「なまけものの論、ドクトルマンボウ昆虫記、氷海を行く」などの北杜夫、「現代と漱石と私」「詩と散文」の江藤淳「春の日のかけり」の島尾敏雄や安岡章太郎である。

三 教材内容からの分類

現代国語の教材から上述の作家を除いてその著しい特徴を考えると、次のような項目は考えられはしまいか。まず情報文化社会における日本人の在り方や構造を追求したもの、次に自然開発、列島改造のスローガンを掲げたが結果、環境破壊・公害などを招来している現状への警鐘と未来像を提言したもの、最後に家永教科書裁判勝訴の反響ともみられる反体制派の教材が表われてきたことであろう。

(一) 日本人論、情報文化論

「甘えの構造」「罪と恥」の土居健郎、「情報化時代の人間」「今日と明日の芸術」の山崎正和、「民衆憲法の創造」の色川大吉、司馬遼太郎の外、前述の田中（美）、梅棹、加藤秀俊のものがある。

(二) 環境保護論

「対談」市民とは何かの宮脇昭、宮地伝三郎、松下圭一や「沖繩、その歴史と文化」の宮城栄昌、外間守喜、野口武徳、霜多正次

(三) 反体制派のものと思わるものに

「夏の花」の原民喜、「豚群」の黒島伝治、「もう一ぺん人間に」の石牟礼道子を始め、宮本百合子、橋川文三、上野英信、埴名麟三、岩崎昶、小田実。

この外、ユニークな異色作家として考えられるものとして、「庶民列伝」の深沢七郎、「幼年時代」の柏原武三、「人間。この非人間的なもの」のなだいなだ、「夢と人生」の埴谷雄高、「赤い繭」「棒」「詩人の生涯」「日常性の壁」「へびについて」の安部公房を始め、吉行淳之介、倉橋由美子、三浦哲郎、小松左京、

草柳大蔵、勝海舟、中江兆民、平塚らいちよう、大宅歩などである。

国語教材の多様性と学年別基準設定の難しさは、特に「現代国語」の場合は特徴的であり、この点、改訂された教科書には多数の新教材が採用された。しかし、これらの作品が「学習指導要領」に基づいて選定された、生徒が「学ぶ教材」であっても、教師の研究と計画と指導法の工夫がなければ、国語教育の目標は達成されないだろう。このレポートでは、教材研究に先だって、教材全体を検討して、その一般的な特徴・傾向を把握しようとしたのである。

2. 古典乙Ⅱでの文学史指導と

教材の発掘

一 古典学習と文学史指導

前学習指導要領の「古典乙Ⅱ」の内容事項の中で、「古文の読解に役立つ……文学史のあらましを知る」とあるのに対し、改訂の「要領」の古典学習の文学史の取り扱いでは「古典Ⅰ乙」では「文学史……の指導は……作品の読解・鑑賞に即して行なうこと。」とあって特別仕立ては不必要とし、古典Ⅱの場合にはこの「文学史」の語はない。作品そのものに深くはいるという根本的性格から作品の読解・鑑賞を離れた文学史指導は存在しないという考え方である。このテーマでは古典Ⅱの指導配慮事項を考えながらも、古典乙Ⅱにおける文学史指導の試みを報告し、生徒が選んだ作品（教材）について述べてみたい。

二 文学史指導の試み

——上古文学について——

1. 教材 高校古典乙Ⅱ古文三訂版（角川）

単元 古事記 万葉集 土佐日記

2. 上古文学を選んだ理由

年度当初の単元であることと上古文学作品は一般に史実と関係が深く、叙事的性格がつよい。叙情性に富む万葉集の歌には社会・歴史を背景にもつものが多く、文学原型をもつ古事記、現実的な記録（虚構的手法はあるにしても）の土佐日記の場合でも同様のことが言える。

3. 指導

＜第一次指導＞ 各単元の読解・鑑賞は普通授業の中で、次の第二次指導の4分野9テーマを考慮しながら演習的に行なう。

＜第二次指導＞ レポート作成指導

(1) 作成期間 3単元学習終了後1週間

6月25日（月）～6月30日（土）

(2) 作成のねらい

作品の背景には必ず多数の民衆（作者自身

を含めて)とその当時の時代潮流(歴史)のあることを追求させるとともに、資料の利用を通しての読書指導と引用文や歌などから新教材となるべきものを発掘しようとする。

(3)分野, テーマ, 選択した生徒数

分野	テーマ (A-I)	選択生徒数	内容
1 古代英雄像	古代人の憧れた英雄タイプと倭建命を中心として浪漫, 悲劇性	15	須佐之男命, 義経伝説など貴重流潭
2 古代歌謡	B 記紀歌謡の叙情性	13	教材を中心として
3 万葉の世紀	C 持統女帝をめぐる悲劇歌人群	7	壬申の乱前後と時代を広げてもよい
	D 人麿の人生と歌	26	不明の点の多い人生
	E 名もなき民衆の声	24	防人, 東歌を中心
	F 万葉女流歌人 (額田王 6)	10	全期にわたり 1人また数人
	G 中期の代表歌人	10	旅人, 憶良ら
4 土佐日記	I 日記文学における価値	26	

(4)レポート作成上の注意

9 テーマの中から選ぶよう指導したが、新しくテーマを設定してもよい。また日本史のレポートならぬように、教科書所載の文や歌例を引用して論述の柱とし、構想がわかるように「小見出し」をつけさせる。文末には参考資料を必ず付記すること。

4. 生徒の作品 (その一)

Eのテーマ「名もなき民衆の声」のレポート作成にあたり引用の比較的多かった歌

(教科書掲載以外の歌)

唐衣裾に取りつき泣く子を置きてぞ来ぬや母なしにして
 父母が頭かき撫で幸くあれて言ひし言の葉忘れかねつる
 我が妻も面にかきとらむ暇もが旅行く我は見つしぬばむ
 荒し男の小箭たばさみ向ひたちか鳴る前しづみいでてと我が来る
 水鳥の立ち急ぎに父母に物言はず来にて今ぞ悔しき
 防人に発たむさわぎに家の妹なるべき事を言はず来ぬかも
 わが妻はいたく恋ひらし飲む水に影さえ見えてよに忘れえず

(外15首略)

百つ鳥足柄小舟歩き多み目こそ離るらめ心は思へど
 富士の嶺のいや遠き山路をも妹がりとはば日に及はず来ぬ
 多摩川に曝す手作りさらさらは何そこの兒のここだ愛しき

稲つけば輝る吾が手を今夜もか殿の若子が取りて嘆かむ

5. 生徒の作品 (その二)

昨秋の研究大会では、①倭建命、②万葉歌人、感情豊かな額田王、③人麻呂の人生と歌、④名もなき民衆の声—防人東歌を中心として—の四編を資料として発表した。その中からレポート「倭建命」の一部を挙げると、

■倭建命とは『一般に景行天皇の皇子小碓命が倭建命とされているが、「ヤマトタケル」という言葉自体を考えてみると、その意味は、日本の武者ということであり、固有名詞ではない。だから、倭建命とは、集合的

表象といえる。特に誰が、ということではなく代々英雄的王者が活動したという伝えが、累積して、倭建命の概念も出来たといえる。つまり、倭建命として、よく知られているイメージは、多くのタケルやヤマトタケルに関する話が累積して一人に集約されることによって出来あがったのである』私は、参考資料を読んで初めて、この事実を知った。…(中略)…今の時代の私の心の中にも、古代の1個の英雄に対する憧れが、あるからであろうか。とにかく、その合的集表象には、古代人のいっていた、英雄観が集まっているとみるべきであろう。また、『5~6 Cの頃、大和側が支配力の拡充のため、昔の大王や皇子の中の英雄がどうであったかを語り、望ましい人間の英雄像を、倭建・小碓命に結晶させた』ことも、倭建命を考えるにあたって、見のがせない事実であると思う。以下略

三 指導結果

文学史レポート提出は、教師の指導に対する評価や読書指導にも役立ち、古典への興味をさそい、生徒の理解にたえる教材の発掘をと意図したのである。年度当初であったため、生徒も積極的にこの作業にとり組み、授業のまとめとしての目的は達せられたと思う。レポートの中に引用した万葉の和歌や資料の図書などは今後の教材研究に資するものも多

かった。初めてのレポート作成であったので、作文指導として、テーマの選定、資料の紹介、構想の立てかた、叙述などについて十分な指導はできなかったが、作品の大部分は、比較的まとまっていたという。

あとがき

現代国語教材の分類・検討は後注10社のものを中心に調査した（中には3年のものを調査できないこともあった、その点、不十分であるが）が、歌人・俳人や説明解説文のようなものは除外し、ジャンル別の分類や従来の教材との詳細な比較もできないし、作品内容の理解も主観的・便宜的なところも多かったと思う。しかし、新「現代国語」教材の展望とその特徴の概略は把握できたと思われ、これら教材をいかに生徒へ理解させるかが、国語教育の重要な一つの課題でもあろう。

古典乙Ⅱにおける文学史指導—レポート作成を通して—は、新しい「古典Ⅱ」の場合にそのままは適用できないけれども、「作品の特質をつかみ、作品と時代や文化の関係について理解」させる「指導事項」の一つの試みとすることもできると信じる。

「国語教材の検討と指導」というテーマで、この3か年継続して漢文（漢詩）古文（古典Ⅰ乙）現代国語、文学史（古典乙Ⅱ）と高校の国語教材全般について検討を加え指導した結果をまとめた。もとより微力でその計画や資料の利用や論述の不明きなど不十分な点を反省しているので、大方の叱正を乞いながら高評をいただき、これら粗案を改めていくことができれば幸いである。

（注）調査した教科書（10社）

東書，旺文，光村，尚学，明治，中央，
角川，実教，教出，筑摩（三省未調査）